

翻 訳

モラル・エージェントとしてのフットボール

(H. H. Almond, *Football as a Moral Agent*,
The Nineteenth Century, vol. XXXIV, 1893, pp. 899-911)

上野 裕一

小松佳代子

[訳者まえがき]

本稿は、スコットランドにあるロレット校 (Loretto School) 校長である Hely Hutchinson Almond (1832-1903) の手による時評的論文の翻訳である。19世紀後半から20世紀にかけてのイギリスでは、集団スポーツを人格陶冶のための有効な教育手段として重視するアスレティズム (athleticism) というイデオロギーが大きな影響力を持っていた¹⁾。このイデオロギーは、かの有名なラグビー校のトマス・アーノルドの次の世代にあたる校長たち、例えばマールバラ校の G. E. L. コットンやアッピンガム校の E. スリングらの下で展開したと言われる。アーモンドもこの世代に属するが、アーモンドの特異な点は、スコットランドという辺境の地にあつて、当時のイギリスの有名パブリック・スクールの教育理念を精力的に取り入れることによって、ロレット校を有名校に仲間入りさせたことにある。スポーツを通じて少年たちの身体のみならず、モラルの形成に真っ正面から取り組むことで学校改革を成し遂げたアーモンドの教育論のエッセンスが、本論文にはちりばめられていると考え、翻訳することにした。イギリスの教育においてスポーツが果たした役割と、アーモンドの教育論のより詳しい分析については、別稿にて論じる予定である。

なお、翻訳は下訳を小松がつくり、上野・小松でその文章を直しながら注をつけていく作業を行った。なるべく原文に忠実に、しかし日本語として読みやすいものにすることを目指した。文中の 1), 2), 3) 等は訳注, * 1 * 2 等は原注である。なお, [] 内は、訳者が理解を助けるために挿入したものである。傍点は原文がイタリック体であることを示す。

1) アスレティズムについては, Mangan, J. A., *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School: The Emergence and Consolidation of an Educational Ideology*, Frank Cass, 2000 参照。

[以下本文]

英国の少年たちがフットボールやクリケットについてばかり話しているということで、苦言を呈された、かの有名な校長は、「では、フランスの少年たちは何について話すのかね?」と切り返した。彼の答は的を射たものであったが、彼は次のことをつけ加えるべきであった。少年たちを扱わなければならないあらゆる人にとって、極めて重要なのは、彼らが話している内容について、たとえそれが過度のものであっても、十分に知ることであると。実際、レクリエーションについて何の知識もなく、それゆえあらゆる人々が日常話していることを理解しないで、それらの人たちの生活に効果のある感化を与えることなどできないし、人間社会の諸事においてレクリエーションがこれまで果たしてきた役割、あるいは依然果たしている役割について公正な評価をすることなど不可能であることが一般的に言えるだろう。というのも、最も重要なことがらにとって鍵となるのは、しばしばこうしたレクリエーションにまつわる環境にあるからである。レクリエーションについては、普通の観察者さえ取るに足らないことと見なすが、歴史を広く哲学的視野に立って捉えることに自負を抱いている人はなおさらである。この点について少し説明しておきたい。フラウド氏 (Mr. Froude)²⁾ は、オックスフォード運動³⁾ の最中、オックスフォードの学監たちは、みな学理上の論議に夢中であったことを指摘している。そんな論議は今や古い神学の領域に入ってしまったのだが*1。

「しかしながら、学生たちは怠惰で、浪費的な生活をしていた。大学での生活費は本来必要とされる額の2倍はかかった。大学には明白な義務が存在したが、その義務は無視され、思いも巡らされなかった。オックスフォードで影響力をもつべき人たちが、多くの学生たちが何をし、何を話しているかということをも十分知らずにいたせいでこのような事態が起こったのである。」

オックスフォードでの生活は、現在に至るまでこのような度重なる無視を引きずって

2) 歴史家・文筆家のJames Anthony Froude (1818-1894) を指していると思われる。 *Dictionary of National Biography*によれば、彼の歴史書を賞賛したのは、「筋肉的キリスト教 (muscular Christianity)」(ヴィクトリア時代前期・中期に多くの人を魅了した、頑強な肉体、敬虔な宗教心、騎士道、競技精神と男らしさを称揚する考え)の代表的人物であるCharles Kingsleyであったという。「筋肉的キリスト教」については、阿部生雄「筋肉的キリスト教の理念-男らしさとスポーツ-」『体育の科学』第47巻第6号1997 参照。

3) 19世紀中頃オックスフォード大学で始まった、英国国教会の高教会 (High Church) の原則を回復しようという運動。宗教改革以前の教会の典礼美によって祭式を刷新しようとし、J. H. Newmanを中心として *Tracts for the Times* という小冊子を出した。ラグビー校のアーノルド校長は、ニューマン主義者を反逆者として激しく攻撃したという (白石晃一「トマス・アーノルドのラグビー校教育についての一考察」筑波大学『教育学系論集』第5巻1981参照)。後に見られるようなラグビー校へのシンパシーからしても、アーモンドも同様に、オックスフォード運動には批判的であったと思われる。

* 1 *Short Studies*, iv. 111.

きたと言っても過言ではない。ギリシャ人は、アジアの圧制からギリシャやヨーロッパを救済するのに必要な条件が何かを知っていたのではないか。また、「世の中の趨勢 (tendencies)」などについて書く近代の作家たちでさえ、正しい方向でものごとを見ようとしていたのではないか。[近代の作家の一人である] クルティウス博士⁴⁾ はギリシャの訓練学校 (training schools) や競技会 (games) について次のように述べている*²⁾。

「ここでは特に、競走、跳躍、格闘、やり投げ、円盤投げといった運動が、完璧なスタイルにまで高められた。その後それは広くギリシャ人に広まった。ここでは一定の倫理的な規則 (ethical rules) が導入され、あらゆる野蛮な情念は排除され、競技規則に対する厳密な服従義務があった。ここでは勝利ばかりを考えて神聖さを失うような、若者たちの野望を禁止する原則が確立されていた。そして最後に、イオニア人の流れるようなローブと対照的に、男性には丈が短く軽い衣服が用いられるようになった。それは体の健康と敏捷性 (health and agility of body) を増進するものであった。」

丈が短い軽い衣服の出現は競技会と訓練学校のゆえである。もしイオニア人の流れるようなローブとそれがもたらす生活習慣が、ギリシャ本土においても優勢なままであったら、マラトンの戦いにおける伝令や、フェイディピデス⁵⁾ の走破のような偉業をなしとげる精神 (spirit) や能力も存在しなかつただろう。その結果、ギリシャもイオニア同様征服されてしまっていただろう。運動や競技会が女性になかったことが、スパルタを除くギリシャ全土において、女性が劣位に置かれた主たる原因であったと言わざるを得ない。またおそらく、動きにくいスカートで締め付けるという蛮行や、纏足、不自然な体のスタイルなどを廃止するのに、ローンテニスやサイクリングや体操といったものの影響の方が、女性の権利や衣服改革を推進する協会よりも、はるかに目的を達するものである。これによって女性的な優雅さや気高さ、そして丈夫さ (grace, dignity, and robustness) といった真の理想が達成され、「ひ弱さ (delicacy)」などは、ほとんど見られない子どもたちを結局は生み出すことになる⁶⁾。

おそらく、ここまで私の言うことを理解してくれた方々でも、レクリエーションが国の性格や、国の歴史にまで広大な影響を及ぼすとは論じ得ない。だが、フットボールに関してなら、そのことができるのではないかと当然のように尋ねるかもしれない。

25年ほど前には、いくらかの例外を除いて、以下のような議論は無駄であった。

4) *The History of Greece* を書いた Dr. Ernst Curtius (1814-1896) を指している。アーモンドが参照している1869年版は東京大学図書館に所蔵されており、引用されているページの内容も一致した。

* 2 Book II. Chap. iv, p. 28 (ed. 1869)

5) マラトンの戦い (B.C.490) の前にスパルタに援軍を乞うため、約240kmを2日で走破したと言われるアテナイ人。マラソン競技の語源となった、約40kmを走って勝利を伝えた兵士とは別人。

「人々は年々田舎を離れ都会に住むようになっていく。鉄道や路面電車のようなさまざまな要因によって、どこにしようとする人々は前世代の人々よりも足を使わなくなっている。必然的に、国民の身体的活力だけでなく、性格のたくましさといった性質もそこなわれている。このような特徴は理論上も経験上も、身体的活力や丈夫さと密接に結びついていることが示されているし、また国家の本来の健全さ (well-being) や偉大さに必要な条件である。幸いなことに、狐狩りはまだ続いている⁷⁾。その熱狂者たちは狩猟法 (Game Laws) を撤廃させないでいる。冬のボートレースは、少なくとも大学においては、隆盛している。激しい運動をし、危険や痛みに向かい向かうといった流儀が上流階級にはあり、大衆の中にもある。彼らは、気力を充実させ汗をかける何かを求めているのだ。この気持ちは増幅されていくのである。

フットボールはつねに、我が国の伝統校で行われてきた。しかしフットボールを取り入れる学校が増え、似たようなタイプの学校も国中に現れてきている。そして今これらの学校は、大きな町の中心地の学校のような高い水準の知的教授を与えようとはしない。これらの学校の主たる目的は、多岐にわたる教育を受ける成長の重要な時期にある子どもたちを、大都市生活とは切り離せない坐業的習慣から救い出すことである。フットボールは、冬の運動にもっとも有効な形であり、それゆえ古い学校から他の多くの学校へと広まった。それは、さまざまな形で行われていたが、2つ [サッカーとラグビー] に落ち着きつつある。両方とも、より組織的、科学的、競争的になっている。そして、これらの起源がどこにあるとも、他の冬の競技や活動よりも少年期の心を捉えているということは言えそうである。新しい熱狂は、学校だけにとどまらない。大学チームでゴット返す川 [ボート競技のこと] が、[フットボールの] ゴールにとって代わられる。クラブは国中にできはじめている。大きな工業都市の近くにある利用可能な土地はみな、すでにフットボールのために使われている。このような趨勢には何らかの知見や指針が必要ではないだろうか?」

この問いには後に答えよう。当時はこのようなことを尋ねても無駄だった。その後の数年は、国際試合 (national matches) によって、この競技は新たなはずみを与えられ

-
- 6) ヴィクトリア時代、女性たちの衣服が不健康で非衛生的であるという理由で批判され、服装改良運動が起こったことについては、ジョアン・エントウィルス『ファッションと身体』(日本経済評論社 2005) 232-235頁参照。但し、アーモンドの言説にも見られるように、進歩的な衣服スタイルを主張した人々がすべて進歩的であったわけではなく、例えば「女性の生殖器官に損傷を与え、したがって女性の妊娠能力を損なうという理由からコルセットに反対した一部の人は実際には保守的であった」という(同上書 159頁)。
- 7) 19世紀イギリスにおいて、狐狩りは健康で有用な、また愛国的なスポーツとして人気を博した。川島昭夫「社会と制度—ジェントルマンと狐狩りのパラドクス—」、飯田操「スポーツ」(ともに小泉博一・飯田操・桂山康司『イギリス文化を学ぶ人のために』世界思想社 2004 所収)。狩猟法については、川島昭夫「狩猟法と密漁」(村岡健次・鈴木利章・川北稔『ジェントルマン その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房 1987) 参照。

た。形は別にして、最初の国際試合がどこかでなされたはずだ。確か60年代、アソシエーションルールで行われたと思う。それは「イングランド対スコットランド」と呼ばれたが、その後もそうであったように、スコットランドチームは、イングランドに住むスコットランド人のアマチュアがほとんどすべて代表していた。ラグビールールによる最初の国際試合は1870年エディンバラで行われた。アソシエーションルールによる本当の意味での最初の国際試合は、1872年グラスゴーにおいてである。このとき以来、フットボールの進歩はとぎれることなく、めざましいものがある。信用できるいくつかの事実だけでもこのゲームの現在の地位と人気のほどを示すのに十分だろう。1年でイングランドのプロサッカー選手に100万ポンド以上の給与が支払われ、人々からは500万ポンド以上の入場料が支払われた。「入場者 (gates)」は、実際に行われている試合のほんの一部にしかいないということは言うまでもない。集め得るデータからこれらの数を見積もるのは不可能である。『スコティッシュ・フィールド』誌は、1回の発行で260試合を報道している。その多くの試合が終了後2時間でオフィスに伝えられる。しかし、試合や競技をしている人のうちほんのわずかしが、試合の結果を新聞に知らせたりはしない。例えば、同じ日に8つのラグビーチームが互いに闘う二つのスコットランドの学校を私は知っているが、配信されるのは最初の試合だけである。ほとんどの村で、報道されない試合や競技会があるだろう。ところが、大きな中心地にはすべて、土曜日のフットボールの試合のためだけに余分の電信技師が雇われているのである。これらの事実からすると、プレイヤーはフットボールを見に出かける人や競技会の結果に熱心に興味を持つ人に比べると、実際非常に少ない割合である。例として、1893年のイギリスのアソシエーション杯の最終試合は、マンチェスターで約4万人の観客の前で行われたことを言っておきたい。

このニュースをすべてよしとしてしまうことは、人々の顕著な動きや興味に関して真実を言い当てるものではない。だが確かに最も重要なニュースではある。ところでもちろん、フットボールの身体的危険はすべての利点を上回ると言う人もたくさんいる。これは先に進む前に処理しておくべき反対意見である。生命や四肢に対する大きな危険は、フットボールの利点、愛国心と殉教を除いた何かの利点よりも重大だというのである。幸いなことに、フットボールの場合、事実は容易に把握できる。フットボールの事故を報道することに新聞は躍起になっているし、鎖骨骨折のような重大でない事故でさえ、記録に留めることが義務づけられている。死亡事故が発覚しないことなど決してない。1890年、1891年、1892年のフットボールによる死亡事故はそれぞれ、23人、22人、26人である。骨折は154件、軽微な事故は212件、そのうちいくつかは非常に軽微であることが報告されている。前述したように、競技人口がどれくらいかを見積もることは不可能なので、この競技の危険性についても正確に割り出すことはできない。とはいえ、フットボールは、競技者5万人に1人以下の割合で死亡事故があり、7000人に1人の割

合で骨折があるとは言えそうである。個人的な経験だが、私は35年間フットボールにたずさわってきた。私が関係していた学校では全く死亡事故はなかった。少年一人、大人一人が足を骨折したことは覚えている。3人腕を折った者がいた。ラグビーのルールでプレイしているスコットランドのクラブで直接的な重症事故は一度も聞いたことがない。1件だけ間接的な重症事故があったが、学校保健 (school health) についての最大の権威者、ラグビー校のデュークス博士 (Dr. Clement Dukes) の経験が、私のものと似ていることをつけ加えてもよい。証拠を示すことはできないが、私の印象では、重大な事故の大半は、粗暴で不正な (rough and foul) プレイから生じている。これは、プロ根性 (professionalism) とそれと連動する優勝杯争奪戦 (cup ties) というシステムについてまわる結果であるように思われる。競技がスポーツマン精神 (sportsmanlike spirit) でプレイされなくなると、プレイヤーは、敵を勝手放題に痛めつけ戦闘力を失いし者 (*hors de combat*) にしようとする。それも、悪意をもってなされたことが露見しないように、姑息な手段でなされる。しかし結局、それ以上のことをしてしまうのだ。私が集め得る全ての事実から言って、以下の結論は妥当なものだろう。不正なプレイや意図的に危害を加える行為は犯罪であり憎むべきものであると世論が非難さえすれば、アマチュアのフットボールは、強壯な筋肉の発達や高度な動物的精神を喚起するのに十分活動的な、他の冬の競技やスポーツが危険でないのと同じくらい危険ではない。それは狩猟より危険ではないし、長期的に見れば、通常屋内で生活する人が戸外で運動しない方がよほど危険である。一言で言うと、胸筋や四肢を発達させ、循環を早め、血液を浄化することで、フットボールは生命を壊すよりもずっと生命を救う (save far more lives) ののである。

危険を根拠とした反対意見に答えることで、この論文の主題を直接進めることができる。確かなことだが、循環を早め、精神を向上させ、血液を浄化するものは何でも、そのこと自体で (*ipso facto*) モラル・エージェントである⁸⁾。これはすべての年齢の者に言えることであるが、少年期には特にそうである。強い情念とあふれるエネルギーを自然から与えられている少年の多くに、スポーツが熱狂的に愛されていることは、この国にとって計り知れない幸福である。それがただ存在するだけでも、またそれが説く実践的な教訓は、若い時期の純粹さについて書かれた全ての書物に匹敵する。私自身についても次のように言える。少年たちがますます過保護に育てられ、痛みを苦しむといけなからといつもおびえ、道徳的・身体的素養は使わなければ脆弱化するという理解もなく、

8) この叙述は、本論文の主題ではあるが、やや説明を要するのではないか。ラグビーは爆発的な力を発揮する無酸素運動と、ボールを持って走る持久的な有酸素運動の両方を必要とするスポーツである。この両者を共になし得るためには、激しいトレーニングにおいて痛みや苦痛に耐えることで、心身を鈍い (dull) 状態から、活動的で鋭敏な (active and sensitive) 状態へと持っていくことが必要である。ここで言われる循環を早め、血液を浄化するということは、こうしたトレーニングプロセスにおいてなされるものであり、そのトレーニングを乗り越えた時、人間としての精神的強さ (mental toughness) が得られるのである。

試験制度で性格形成が二次的にしか扱われないという、享樂的で気ままな習慣がはびこっている状況下では、フットボールを熱狂的に愛するという望ましい不滅の伝統の基礎づけをもたないとするならば、私自身、学校を運営するという責任を負うことなど考えもしなかったろう。

純粹さに深く関わる徳、国家が偉大かつ真に繁榮するのに不可欠な徳、すなわち勇気という徳をフットボールが育てることについて長々と述べる必要はないだろう。こうしたフットボールの感化力は是非とも必要なのである。いわゆる現代的な精神 (modern spirit) は勇気を好まない。一般的に体罰は良くないという感情論や、罰課 (lines)⁹⁾ や居残りなどを好むことへ容易につながる。こうした罰は少年が戸外に出るべき時に屋内に留め、また刑罰的訓練と同様、その間接的な悪は、より重大だと私は思う¹⁰⁾。それに対してフットボールのスクラムは偉大な教育者である¹¹⁾。私には少年たちの考えがよくわかる。彼らは身体的ではないすべての罰、痛みを避けようとする男らしくないこと、これらに対して抵抗する健全な感覚を持っているものだ。この感情は、小さな手術のときに、麻酔の使用にさえ抗するという偏見として表れるようなものである。

時代精神 (Zeitgeist) にとってはおそらくショッキングなこの意見表明に対して、次のことである程度ショックを和らげたい。フットボールは丁寧に指導すれば、ある徳の訓練場になるだろう。この徳は、あまりにも現代的すぎて、明確な呼称がまだ見つからないのだが、つまり、知識に基づいて自己を強壯な健康状態に必ず持っていくことである。神と隣人に対する最上の義務を除くと、これは学校で少年が学べる、他に比ぶべくもない最も重要なものである。そしてフットボールはこの点から見た場合、他の何にもまして、よりよい実物教授 (object-lessons) を伴った真の教育者なのである。ボートレースという例外はあるが、ボート競技を行うにはなかなか設備が整わない。健全な精神を持った少年は、みな、自分の学寮のチーム、学校のチームに入ることを望み、また

9) 生徒に、ある行数のラテン語の詩や反省文などをくり返し筆記や暗唱などさせる罰。

10) 日本では戦前から体罰は法禁されているが、イギリスは体罰容認国で、体罰の廃棄を明記した教育法が成立したのは1986年のことである。この法においても、独立学校 (independent schools) は除かれている。寺崎弘昭『イギリス学校体罰史』東京大学出版会 2001参照。

11) ここにも説明を加えておきたい。スクラムが偉大な教育者であるというのは、第一にスクラムを組むフォワードの選手は、人の足下で自分の体を犠牲にしてボール争奪をし、ボールを生かすことを繰り返す。特にプロップの選手は、仲間を支えるために人の犠牲になり続けるという不条理に耐えなければならない。それがプロップの選手のすばらしい人格をつくっている。第二に、スクラムは体力や体格の違った (現在では8人の) 選手の組み合わせによって成り立っている。対峙する相手に一人が負けるだけでバランスが崩れてスクラムは完全に崩壊する。全員が一つの固まりになるような修練が必要である。より強いまとまりができた時相手を凌駕し得ることからも、最前列の者だけでなくサポートする選手も全力で組まなければならない。自ら全力を出しつつ仲間の弱い部分を補完しあうという、このスクラムの修練が教育的でないはずがない。第三に、スクラムはとても危険だということが挙げられる。対峙する相手を意図的に怪我させようとするばいからでもできるが、それをしたらすぐに命に関わるようなことになる。闘う相手の命を守りながら、自らの力を最大限発揮するという、アンビバレントな状況に常に置かれることで、おそらくスポーツマンとしての精神的な強さと共に倫理的なものが磨かれると考えられる。

は何らかの方法で学校フットボールの世界で頭角を現したいと願っているのは明らかだ。彼らにとってそれは直近の目標である。少年たちはみなその性質上、遠い目標よりも直近の目標のために生きるので、やり方さえわかれば、そのような直近の目標に向かっていくだろう。ラテン語の散文やシベリアの川について、たとえラテン語がいかなる職業にも有用な理解力を鍛えるものだともわかっていても、またシベリアの川についての知識は、彼が武器を持ち戦争に行くときに何かしら役立つとわかっていても、それらには何の熱意も示さない少年が、自分自身の生理学的事実についての講義は熱心に聞き、それらが自分の直近の成功に実践的につながっていることを見いだすのである。つまり、なぜ少年は、間食 (grubbing) という悪い習慣 (vicious practice) に陥ってはいけないか。間食は、下手すると喫煙以上に将来の不健康を招くからである。あるいは、なぜ少年は、手に入りやすい野菜を食べないで、他の食物を飲み込むような、生徒の間によく見られる不健全な習慣に陥ってはいけないか。なぜ彼は、冬の荒天の下でも、風雨に立ち向かわなければならないか。そうすれば少年は、喜ばしい健康を享受できるからである。またなぜ少年は、呼吸器を痙攣させてはいけないか、なぜ足をねじってはいけないか。彼が、楽に呼吸をし、捻挫を防ぎたいならそのようなことをしてはならないのだ。こうした類の多くの授業は、フットボールに熱心な学校では大いに取り入れられている。

私の説明は、いわゆるパブリック・スクールに特に関係しているが、同じことが多かれ少なかれ全ての学校に当てはまる。

どう呼んでもいいが、フットボール狂い、つまり熱狂者は至る所にいる。この国では少年はみな、自分の住む地域の主力選手たちの良さについてあれこれ論じ、チャンスがあれば、プレイして他から抜き出たいと願っている。

なんと絶好の機会ではないか！とはいえ、いくつかの例外を除けば、このチャンスが本来あるべきように生かされているとは言えない。村の学校から古い基金立学校まであらゆる学校から来た少年たちに、運動や呼吸、栄養、衣服、それらと寿命や心身の活力との関係について何を習ったかとよく訊くのだが、答はいつも「何も習っていません！」である。目を見開いてしっかり考えていこう。人々が大都市に押し込められているという不満がいたるところで聞かれる。今の生活状況では、体質 (physical qualities) が劣化するに違はなく、また実際劣化しつつあるというのである。この結果私たちの文明は、悪い方へ向かうと多くの人が述べている。私はそのような悲観論を信じているわけではない。そこから逃れる方法があるからだ。つまり、この名の無い徳、いわば「広く言えば節制」を教えることがその方法であるにちがいない。——この徳は、宗教が頑迷さを克服するのと同様、狂信に陥らない「節制」をもはるかに超える徳である。この徳は新しいものではない。というのも、近代科学がその枠を広げ、憶測を知に変えてはいるが、ギリシャを東洋の専制から救ったのは、完全ではないし、しかも経験的ではあっても、この徳の実践なのだから。この徳の輝かしさは消えつつあっても、そのす

ばらしさの根拠となる条件は、次の文言に見られるように、今なおはっきりしている。「支配と闘った彼は、あらゆることにおいて節度があった (temperate in all things)」。

この観点からすると、人口の多い小さなこの島国にとって、競技活動は、フットボールのような、普遍的で魅力的な (universal and irresistible) 形になるのがよい。

理論的・実践的に未来の市民 (the future citizens) を訓練したいと望むすべての人にとって、フットボールは教科書となる。こうした考えを説明するのに、私は、[ラグビー校の校医である] デュークス博士の『学校保健』という本の第8章を参照したい¹²⁾。そしてまさに、ラグビーの起源の場所から当然にも生まれたこの本の論調と精神 (tone and spirit) もすべて参照しよう。

流れは正しく進んでいて、品行が、最も広い意味では、宗教の本質であるのと同様、教育の最終目標の重要部であるという真実を、より多くの教育者たちが掴み始めているとしても、今なおフットボールは、他の運動競技と同じく、一向に指針を得ることなく、手探り状態である。確かに、フットボールのプレイヤーたちは、私たちが学生時代ボートレースに向けてそうしたように、大会に向けて頻繁に「トレーニング」している。しかし、彼らはしばしば知識のないままトレーニングし、あらゆる誤りを犯し、私が大学でチューターや教師から学んだこと以上のことを学ぶこともなく、自分の体質 (constitution) について思い違いをしているのである。フラウド氏が論じた彼らの先輩たちと同じく、大学のチューターや教師の考えは机上の空論で、突然「トレーニングをやめる」という誰が見ても体に悪いことについてさえ、何ら実践的な助言を与えていない。まして彼らは、本当のトレーニングが人生を楽しむのに必要な健全で力強い条件であること、そのようにいつも人生を楽しんでいる人は、幸福への正しい道を歩んでいるだけでなく、ほんの少し食餌や運動の仕方を変えれば、フットボールや、ボートレース、その他いかなるスポーツにも適応できるといった助言を与えることもできない。

この部分の主張は、それ自体一つの論文になるようなものだが、結論を述べる前に、若者に感化力を持つ人たちに、次のことを訴えておきたい。ある一流クラブがすでにやっているような、大きな試合の後に、「入場料」収入で豪華な食事 (luxurious dinner) を供することはやめた方がいい、ということである。そのような食事は、大学その他の遠征チームの場合、ツアーの残りの試合を台無しにするだけでない。酩酊の誘因となる可能性を別にしても、生理学上、激しい運動後の食餌 (diet) は簡素なものであるべきだ。実際、プレイヤーたちが常に節制に努めていれば、現在よりずっと長い期間プレイ

12) Clement Dukes, *Health at School: Considered in Mental, Moral and Physical Aspects*, Cassell, 1887 のことだと思われる。学校や学寮の選び方から、健康維持にまで及ぶ本書の第8章は活動 (Play) と題されている。内容は運動、ゲーム、トレーニング、活動時間などである。興味深いのは、そこで論じられているゲームが5つあり、フットボール、クリケット、ボート、水泳に加えて、「溺れたと見られる人の回復 (Restoration apparently drowned)」という項目があり、今日で言うところのライフセービングが挙げられていることである。

を続けることができるはずである。

ここまで私は、フットボールは競技そのものを楽しむためにプレイするものであり、あるいは学校、学寮、クラブ、村やその他のコミュニティを代表するチームで、男らしい勇敢さを試す手段であると見なしてきた。この観点からすると、フットボールは、代表選手たちに良い影響を与えるだろうし、代表になりたいと望む多くのプレイヤーたちにとっても良い影響を与えるだろう。そしてフットボールを統括する機関 (football authorities) が、あらゆる粗暴で不正なプレイを強力的に廃絶すれば、この競技は、ここまで列挙してきた利点に加えて、勇壮さ・公正さ・平常心 (chivalry, fairness, and good temper) などの点において教育となる。記録が正しいとすれば、これらは、父祖の時代ほど、現在我が国の大衆は持ち合わせていない性質である。

もちろん、こうした見方は、現代の二大フットボールの形、つまりラグビーとサッカー両方に当てはまる。しかし、驚くべきことに、イングランド北部全域、他地域でもたいてい、サッカーは地区代表の競技ではなくなってしまった。北部の主要クラブは、プレイヤーたちを育てるのではなく、買収し、国際試合その他の大きな試合に参加するようなチームは、ほとんどプロのプレイヤーで構成されていると言ってもよい。以前はそうではなかった。

1872年イングランドのプレイヤーのうち3人はオックスフォードから、1人はケンブリッジから、1人はハロウレンジャーズから、そして残りの何人かが純粋にいろいろな主要都市の代表選手であった。スコットランド人のプレイヤーはすべて熱意ある純粋なアマチュアで、主に労働者階級出身者であった。多くの点で変化は嘆かわしい。しかし公正を期すために、利点も述べておこう。

プロが、たいていアマチュアよりうまいプレイをすることは、認めざるを得ない。実際、イギリスのクリケットの場合のように、アマチュアがシーズンを通して競技に集中できる条件が与えられていない限りはそうである。したがって大きな試合は、高度な競技のすばらしい披露の場であり、これによって、勇気や活力や忍耐に対する民衆のあこがれが呼び起こされる。都市生活や現代の人工的交通手段が増加することで、人々が軟弱になっていて、この傾向は、何らかの対策 (agencies) を講じないと増幅する。プロの試合へのあこがれは、この弱さを克服する傾向をもたらす。

大きな試合はまた、どこの小さなグラウンドでもまねされる。少年たちは本物のボールを蹴りたいと思い、その間自分ができる最高のまねをして楽しむだろう。同じ精神 (spirit) は、他の形でも表れ、近頃のいわゆるサイクリングやゴルフのマニアは、フットボール人気によって、足を使った運動が広く好まれるようになったことの反映である。

しかし、多数の観客についてはどうだろう。私について言うならば、何らかの形の運動を自らに課していこうと思う。そして、フットボールのプレイヤーたちへの以下の教訓 (lesson) の内容以上に強く主張したいことはない。選手時代が終わった後、坐業に

就いているのなら、時間のある午後は自分の四肢を使い、体内の循環を早めるべきであるという教訓である。とはいえ、観客の大部分は肉体労働者だということも忘れてはならない。彼らは土曜の午後まで体を動かしたくないと思っているが、しかし休息と戸外の空気と血を騒がす何らかの興奮を欲している。これらすべてを彼らはフットボールの大きな試合から得ている。フットボールの試合がなかったら、マンチェスターやブラックバーン周辺の道路が、夢中で試合会場に向かう歩行者でごった返すことはないだろう。反対に、パブや読書室や青年会館や、様々な屋内で行われる「展覧会 (shows)」が混み合い、息詰まるほどとなろう。反対の面もあることはわかっているし、しばしばそう言ってもきた。「見物するのは、墮落しつつある国民の証である。全盛期にある国民というのは自らことをなすものである。」という反論だ。それは確かである。しかし、健全な、あるいはよいことを人々にさせる見せ物は、そのような感化力を持たないものとは慎重に区別すべきである。例えば剣闘ショーは、ローマ没落の要因となったとよく言われるが、疑わしい。命を賭してそれを廃絶しようとした聖職者たちが、おそらくローマの没落を早めたのである。剣闘ショーの悪い点は、それが男らしさを披露するからではなく、殺人を見せ物にすることにある。ホラティウスはその没落の根深い原因について、ずっと以前に思い当たっている。

リュディアよ 万神の名にかけ

おまえに頼むのだが シュバリスをなぜ

絶望に追いこむのか どうして

彼は埃やら日差しに耐えて、訓練の広場に行くのを避けるのか¹³⁾

以上が、サッカーの試合〔プロ化したフットボール〕の、本来そうあるべき姿を示す良い点である。他方、非常に憂慮すべき欠点もあり、しかもそれがひろがっている。

1. アマチュアのプレイヤーが、町や州 (county), 国を代表したいと正当に望むが、実際には排除されている。
2. プレイヤーがすべてプロで占められると、クリケットやカーリングの競技に見られる、階級の違う人々を統合するという効果をサッカーは失ってしまう。それはプレイヤーを大衆から切り離すことになる。
3. 金銭という要素が重要になりすぎる。そうなる则必ずスポーツ本来の価値が危機に

13) 『歌集』第1巻1・8「リュディアに」からの引用と思われる。リュディアは小アジア、シュバリスは南イタリアの都市。共に、繁栄、贅沢を暗示しているという。アーモンドの文章ではSybarinとなっているが、Sybarisの誤りであろう。訳については、Everyman's Library版の*The Collected Works of Horace*, J. M. Dent & Sons, 1961, 及び鈴木一郎訳『ホラティウス全集』玉川大学出版部2001を参照した。

さらされる。

4. アソシエーション、つまりアマチュアの協会が、今はゲームを統括しているが、リーグのようなプロの組織によって、プロはいつでも支配権を手に入れる¹⁴⁾。経験が示すところでは、どんなスポーツでもアマチュアの監視なしに金銭を得る方法が開かれると必ず不正の生じる要素が入り込み悲惨な結果になる。(アーサー・バッド氏の『ラグビー・フットボール』という本に載っている論考¹⁵⁾を参照のこと)
5. スコットランドへのプロの導入は、当初は密かに、今や公然と行われているが、そのせいで我々の村のクラブは多大な悪影響を被った。そのようなクラブ名をいくつか挙げることもできる。かつて上位を占めていたクラブでも、最高のプレイヤーたちが密かにスポーツマンらしくないやり方で、買収され引き抜かれてしまった結果、地位を失い凋落している。これは当初イングランドのクラブによってなされたことだが、スコットランドの都市のクラブも、多くの「入場者」を得るには追随するしかなかった。事情通に聞いて確信したのは、多くの町で競技がなくなるだけでなく、このシステム全体の結果は、派生する問題があまりに込み入っていてここでは言及できないが、未熟な者に対して、予想以上に、多くの点や方向性において、道徳的荒廃を招く (most demoralizing) ということだ。
6. プロのフットボールはプレイヤーにも確実に害悪である。それに従事している間、彼らは何の職業に就くこともできないばかりか、プレイできるのは短い期間である。選手生活が終わったとき、職もなく取り残される。しかも契約するという習慣や考えに慣れた後なので、何かの職業でつましく糊口をしのごというようなことができない。救済策はどこにあるというのか。サッカーやリーグ¹⁶⁾が崩壊する可能性はこの点にある。リーグの競技は、自らのうちにそれが衰微する要素を含んでいるということである。サッカーは、当初困難を極めたが、純粋なアマチュアのフットボール制度をつくった。難しいのは、プロとアマの境界線をどう引くかという問題

14) ラグビー・ユニオンが、プロとアマを巡って分裂するのは1895年である。その年、ヨークシャーの11のクラブ、ランカシャーの9カ所、チェシャの2カ所、計22の「入場料をとる」クラブが、ラグビー・ユニオン会員を脱退し、「北部ラグビー・フットボール・ユニオン」を設立した (E.ダニング, K.シャド『ラグビーとイギリス人』ベースボール・マガジン社 1983, 第8章「リーグとユニオンの分裂」参照)。アーモンドのこの論文は、分裂に揺れるこの時期に、アマチュアリズムを称揚するという政治的な意図もあったのではないかと思われる。

15) F. Marshallによって編集された*Football: The Rugby Union Game*を指していると思われる。アーモンドが参照したのは1892年発行の初版であろうが、記者が見ることができたのは、改訂第2版である。ここに、Arthur Buddの手による“Past Development in Rugby Football, and the Future of the Game”が収められている。本書には、出版年の記載はないが、1894年までのシーズンのレビューが掲載されていることから、1894年の発行と思われる。本書131頁以降で、バッドは、プロ化についての批判を展開している。その批判の一つとして、アマチュアの監視なしに利益を得る道が開かれると腐敗が入り込むと論じている (p. 132)。この貴重な史料は、秀明大学の川島淳夫先生のご厚意により読むことができた。また出版年についても、川島先生のご教示による。

である。地域クラブに登録するのに、一定期間の居住が義務づけられているので、プレイヤーはその間以前所属していたクラブでプレイする資格を持つ。この期間に困難が生じる。非常に大きな問題である。大英帝国の男らしいスポーツと実直な性格の将来を気にかけるのであれば、この問題解決に知恵を絞るべきである*³。

それにしてもラグビーという競技の将来はどのようなものであるべきだろうか。これは緊急に考えなければならない問題であるし、重要な諸問題を含んでいる。これを考えることがどれほど重要かと言ったら、私はばかにされるだろう。オリンピックゲームの運営にギリシャの将来がかかっているとギリシャ人が言ったら、当時の人々にばかにされただろうというのと同じように。もしこの論文が直接・間接にラグビーの運営に関わる人々に以下のような影響を与えることができれば、これを書いた私の目的は達せられる。ラグビーを運営する人々が、ラグビーを広く愛国的な観点から見て、将来の厄災を避け、その厄災に至る諸段階を後戻りさせることに全力を挙げてくれればと思う。目下のところはできている。イギリスのラグビー・ユニオンはその大多数がラグビーのプロの公認を拒否した。しかしこの問題は繰り返し提起されるだろう¹⁷⁾。私がサッカーのプロに対して挙げてきた反対意見の全ては、ラグビーという競技にも同じくらいあてはある。そのいくつかは、より強く主張される。プロ化は、プレイヤー自身にも良くない。というのは、プロになればプレイヤーは[サッカーよりも]短い期間しかプレイできないし、実質上、アマチュアのプレイヤーを一流のフットボールシーンから排除してしまう。これだけでも、一つのゲーム[サッカー]が有給の選手による見せ物になったのに対し、もう一つのもの[ラグビー]は一つのスポーツとしてしっかり守られるべきであることは明白だ。むろんそれだけではない。サッカーという競技の開放的な性質から、クリケットにおけるアンパイアと同じように、アンフェアなプレイがあれば、たいていレフリーが見つけて罰することができる。ラグビーという競技の性質上、これは不可能

16) 1890年までにヨークシャー・ラグビーは主としてリーグ主義に基づいて組織されるようになっていた(ダニング、シャド 前掲書 207頁)。ここで言及されているのは、こうした動きのことだと考えられる。

* 3 これを書いた後、純粋にアマチュアの協会所属クラブの間で、今年ある大会が組織され、79のクラブが参加したことを知った。工業生産地のクラブはほとんどなく、その大部分は北西部沿岸の炭坑の地域のクラブである。古くからあるイトン校やクルーセーダーズが、ダーリントンやビショップ・オークランドからきた根っからの労働者と友好的な試合で対戦するというのを考えるのは楽しいことである。真のスポーツマンならこのような動きが成功し広がることを望むに違いない。

17) アーモンドの論文が書かれて約1世紀後の1994年、IRB(国際ラグビーボード)は、「アマチュア規定の廃止とプロ容認のオープン化」をパリにおける臨時総会で決定する。ここにおいて、ラグビーはサッカーと同様にプロ化へと大きく舵を切る。日本も2001年、代表選手を所属企業から日本協会に外向させる形で契約を結ぶ「オープン化」を開始した(宿沢宏朗・永田洋光『日本ラグビー復興計画』TBSブリタニカ 2002参照)。プロ化が容認される状況下において、ここでアーモンドが憂慮した問題が、現実のものになりつつあると言うことができる。

である。ラグビーという競技には、ある一定の善意 (*bona fides*) がなければならず、そうでなければすぐに競技ができなくなる¹⁸⁾。しかしプロのプレイヤーに、この善意を期待することはできない。彼の目的は、どんなことをしてでも勝つことである。彼の生活は自分の成功にかかっているのだから。

その結果は言うまでもない。ファウルやアンフェアなプレイについて、レフリーが罰することができないようにごまかされてしまう。そうするとファウルやアンフェアなプレイの真偽など、どうでもよくなってしまふ。ついには、この競技は騎士道精神 (*chivalry*) や名誉の感覚を伸ばすものではなく、何よりも悪い見本となる。それは、フェアプレイやスポーツ本来の姿という古いイギリスの概念と正反対のものとなる。さらに、イギリスのラグビー・ユニオンの少数派に一つだけ言いたい。もし彼らが多数派になったら、スコットランドからすれば、国際試合であるものを、過去の遺物にする。いくつかの大きな試合でいわば隠されたプロ根性が入り込み、当然の結果として、見せかけの競技やごまかし、不快な感情を感じた経験のある人は、この点 [プロ化すれば国の代表同士の試合などなくなる] を以前から警戒していた。パブリック・スクールやスコットランドの主な通学学校 (*day schools*) の人々ほどではないにしても。スコットランドの通学学校が、イングランドの場合以上に、みなプレイヤー育成の場であることは誰もが認めている。

それにしてもなぜ、プロを好む動きがイングランドでここまで進んだのだろうか。主に二つの理由が挙げられよう。一つは優勝杯争奪戦 (*cup ties*) が始まったこと、もう一つは競技方法の無思慮な変更である。この二つの要因は完全に切り離せるものではない。

優勝杯争奪戦は、現代の競技にはびこる、道徳を腐敗させる (*demoralizing*) システムの主要なものである。私が学生の頃、大学でクリケット (*eleven*) や、ボートレースをして、何かをもらうことなど全くなかった。そのこと自体の喜びと名誉で十分だった。残念なことに今やそうではない。校長たちが無思慮に、浪費という問題を無視して、「ブレザー」や、ジャージ、スカーフなどといったものを1位や2位のイレブンやフィフティーンに与え、あろうことか、フットボールの代表選手 (*caps*) に野卑な金銀を与える。スコットランドでは、喜ぶべきことに、フットボールの学校対抗戦で優勝盾を求めることは減っている。私の考えでは、こうしたものはスポーツから純粹さや真正さを奪い、偽りの熱心さを入り込ませる。これは、あらゆるごまかしに簡単に陥る。ヨーク

18) これは、サッカーとラグビーの違いを的確に表現している叙述である。ラグビーはサッカーと違って、モールやラックという密集状態ができる。その中で起こっていることすべてをレフリーが見ることは不可能であり、逆にその中でレフリーに気づかれずに相手に怪我を負わせようと思えば簡単にできるとも言える。競技のこのような性質上、ラグビーのプレイヤーには他のスポーツ以上に厳しい倫理性が要求される。それゆえ例えば、スキルの未熟さによって味方のプレイヤーを危険にさらした場合でも、ペナルティが課されることさえある。

シャー地方や、その他の州の優勝杯争奪戦ではこうしたことが起こっている¹⁹⁾。クラブの執行部は、当初は勝つために合法的なことをする。だが次には、合法かどうか疑わしいことをするだろう。彼らは選手を獲得できる場所ではどこであろうと、勧誘を行う。こうした勧誘は、説得面において、簡単に公正な域を超えてしまう。墮落に至る道筋の諸段階はあまりに明白なのでこれ以上書く必要はない。それに比して、古いラグビーという競技では、公正と考えられている選抜方法を逸脱するということにはなかった。体重と持久力は簡単に獲得される。その大部分は、トレーニングと調整練習によったものだ。

また、ドロップキックは子どもの頃から練習すべき技能だった。この競技においてそれは非常に重要な要素であり、パブリック・スクールでは、ボックスのプレイヤーの必須要件であった。しかしその時、いまいまいましいお金の要素が入り込んできた。大勢の「入場者」が、次のようなものをまかなうお金を得るために求められるようになってしまった。1人あたり25シリングもする実に不快な試合後の夕食、頻繁に繰り返される遠征費用、そしてそのお金は、次第に秘密のことにまで使われるのではないかと私は恐れている。こうした「入場者」を獲得するためには、観客を引きつける必要があった。観客はまっとうな前向きの (*honest and forward*) プレイを好まない。彼らは速さや目立つプレイ (*pace and show-off*) を好むのだ。ところで速さは、なかなか得られない。[速さというもの]は生まれつきのもので、つくられるようなものではない (*Nascitur non fit*) からだろう。その結果、もしクラブにいなければ、どこかで見つけなければならなくなる。そうになると、競技は、速さを奨励しそれに報償を与える方向へ変えられてしまうだろう。このことによって、スピードが速くなりすぎている。これは、プロ根性を間接的に養成してしまうことに加えて、有害な多くの結果を伴う。

第一に、男たちは早い段階でフットボールから引退するようになる。1870年くらいまで、すなわち観客向けの要素がゲームをだめにする以前は、少なくとも40才くらいまではプレイを続けることができた。私は50才のすばらしいフォワードの選手を知っている。

第二に、多くの少年や若者をプレイの不適格者にしてしまう。心臓の弱い傾向の子はプレイできないことになるし、急成長期にある子どもは、多くても週に2回以上プレイすべきでないということになる。

第三に、ドロップキックを奨励しないようになってしまう。学校という観点から見た場合、これは非常に悪い。ゲームの流れがうまく進行しないときに、ドロップキックは、最良の選択肢である。

第四に、速さを求めることで、我々の競技全般に見られる悪しき効果をラグビーもまた持つことになる。つまり下半身ばかり動かして、上半身は動かさないという欠点であ

19) 先にも述べたように、入場料を取り、勝ち抜きトーナメントや、リーグ制をとる形のラグビーを主導していたのは、ヨークシャーのクラブである。

る。

観客や入場者を得ようとして、こんなことがなされてきたのだ。これらの悪い点を修正して、そしてプロ化を本当によく止めるには、ラグビー・ユニオンがいくつかの面で、その歩みを後戻りさせるしかない。

この提案には当然、「逆行的な」とか「反動的な」という言葉が用いられるだろう。しかしなぜ批判されるのかと問いたい。みないつか、一方へ来すぎたことに気づくはずである。実際、本当に前へ進もうと思ったら、時には後戻りすべきなのである。

こういう場合、賢明な人は例外なく「逆行的な」ものである。人並みの人は、今ある地点で立ち止まる。愚か者は間違った方向へ歩みを進めてしまう。同じことがある社会 (community), つまりラグビー・ユニオンにも当てはまるはずだ。ラグビー・ユニオンは、観客の喜びや楽しみよりもプレイヤーの利益を考えるべきである。そして何よりも、国家の利益を考えるべきである。国家の繁栄や存立そのものが、真の男らしいスポーツと活動的な習慣に依拠しているのだから、その法制 (legislation) のいくつかを再考すべきである。特に、もう一度古いオフサイドのルールを復活させ、「かかどで蹴り出すこと (healing out)」はやめるべきである。このような実践は、速さに必要以上の価値を置くだけでなく、古い正統でまっとうなスクラムの成果^{*4}を取り除いてしまう⁽²⁰⁾。そうしたスクラムは、身体的、さらには道徳的にも最高の資質を発達させるのに大いに役立ってきた。私の知るラグビーのフォワード選手は、みな男の中の男 (distinctively a man) である。そしてさらに、ドロップゴールにも、もう一度正しく公平な価値を与えるべきである⁽²¹⁾。ドロップキックには、上で示したように、また別の価値があるのに、それを妨げるから、速さばかり育てる破滅的な傾向が出てくるのだ。

最後に、プレイヤーの数をさらに限定しようとする動きに、すべてのフットボールのプレイヤーが立ち向かうように、しむけなければならない。その数が20人から15人に減

* 4 *Rugby Football*, pp. 124-125

- 20) 上記原注の箇所で、バッドはスクラムをまわすこと (wheeling or screwing) と、かかどで蹴り出すこと (healing-out) を批判している。前者は、フォワード最前列か第二列の後にボールを保つことで敵に攻撃されまいとするあるまじき行為と批判され、後者については、以下のように述べられている。「どこであれ、あらゆる試合で、ボールがスクラムの中央に入れられるとすぐ、両者ともそれを先に引き寄せようとする。ボールを取ろうとたくさんの足で引っ掻くのが見られる。このやり方は、極めてアンフェアで、オフサイドのローの精神に全く反する。オフサイドのローは、スクラムの集団がボールの最前線であるとしているのである。しかし、暗黙のうちに、これは正当と見なされ、それに反対するのは、時すでに遅いのかもしれない。したがって、引っ掻いてかかどで蹴り出すプレイは、まっとうなスクラム (honest scrummage) の役割を破壊する以上のことをしていると言うだけで満足しなければならないだろう」(p. 125)。バッドは、後に蹴り出しつつ、前に押すことなどできないから、healing-outによって、スクラムを実直に押すというラグビーの重要な良さが損なわれることを危惧してもいる。
- 21) ドロップゴールは得点を重ねるべき時に、淡々と点を取っていくことができる。しかしそれはモールやラック、スクラムからボールを展開してトライをとるといった、観客が求めるような多様なプレイとは違う。ここでアーモンドが主張したいのは、観客に迎合して本来得点を重ねる時に、別のプレイが選択されてラグビーそのものがゆがめられてしまうという危惧ではないだろうか。

らされたのは残念だ。これ以上減らすと、学校では、すべての少年たちが同じ時間にプレイするスペースを用意することが、今以上に難しくなる。またそれは、より多くの男たちをプレイヤーという身分から遠ざけ、見ているだけの観客に仲間入りさせてしまう。

結論として、仲間の校長たち、特にイギリスのラグビーの優れた養成所を運営する校長たちに訴えることばを付け加えたい。

イングランドでは学校間の試合が珍しいこともあって、私が知る限り、古いラグビーという競技の価値下落や、その変化が性格や習慣に間接的に及ぼす影響について十分に気づかれていない。それを防ぐあらゆる手段が講じられなかったならば、以下のようなことがすぐにでも起こる危険がある。すなわち、学校や大学を卒業後は、ジェントルマンが、威厳ある古いラグビーという競技から離れてしまい、それが学校だけでやる競技に成り下がって、その名が、金儲けや策略、扇情的な見せびらかし、そしてまったくの腐敗の代名詞になる危険である。校長たちは奮起して、こうした価値下落や腐敗のプロセスに対抗できるよう彼らの感化力を行使すべきである。もしこの状況が続けば、「最良なるものの腐敗は最悪である (Corruptio optimi pessima)」という言葉が、ラグビー以上にあてはまるものはないということになってしまうだろう。

[付記]

本論文の翻訳にあたって、多くの人にお世話になった。注でも記したように、秀明大学の川島淳夫先生には、貴重な史料を見せて頂いたばかりでなく、古いラグビーのルールについてご教示頂いた。古いラグビーのイメージについては、防衛大学校の山本巧先生に見せて頂いた、民俗フットボールの様子を映したビデオから多くの示唆を得た。医学的な点については、埼玉医科大学の山田睦夫先生にアドバイスを頂いた。文中のラテン語について、同僚の安田淳先生、桑野佳明先生にご教示頂いた。これらの方々に記して謝意を示したい。もちろん、訳文・注記に誤りがあれば、それはすべて訳者の責任である。ご指摘いただければ幸いである。